

第二百六十話 フーバーは何を語ったか

ハーバート・フーバー（米国第 31 代大統領（1929～1933）1874/8/10～1964/10/20、90 歳で没）著「裏切られた自由」は、日本語版で 1300 ページ近くに及ぶ第二次世界大戦の回顧録だが、開戦に至る経緯から戦後の動向までを膨大な資料を駆使して検証している。日本に関わる記述もあり、大いに参考になる。彼自身は、日本を「ガラガラヘビ」と呼ぶなど決して親日家ではないが、それだけに元大統領の指摘には頷ける点も多い。



1 「裏切られた自由」の全般的枠組み

欧州への干渉主義を国是とする米国を対独戦に引き込みたい英首相チャーチル、支那大陸を毛沢東の手で赤化し、日本を放逐せんとする野望を持つスターリン、ルーズベルト政権の中核まで浸透していた共産主義者が陰に陽に蠢動し、米国が日本を徹底的に外交・経済そして軍事的に追い詰める様が随所で語られる。

2 外交・経済政策

渡辺惣樹著「誰が第二次世界大戦を起こしたのか」（128p～129p）によれば、『FDR は三選のためには国民世論に迎合せざるを得なかった。FDR は反ヒトラー・キャンペーンだけでは世論は動かないと考えた。この世論を変えるには、ドイツによる明確なアメリカ攻撃が必要であると考えた。そしてそれがうまくいかないことがわかると、ドイツと軍事同盟（日独伊三国同盟）一九四〇年九月二十七日締結）を結んでいた日本を刺激し、アメリカを攻撃させることを考えたのである。フーバーは第 36 章から第 42 章（第 1 部第 10 編）で、FDR 政権がいかにかドイツを刺激したかを詳述し、それがうまくいかないと知るとターゲットを日本に移したと述べている。フーバーは次のように書いている。（第 36 章）<国民も議会も我が国の参戦に強く反対であった。したがって、大勢をひっくり返して参戦を可能にするのは、ドイツあるいは日本による我が国に対する明白な反米行為（some over against us）だけであった。ワシントンの政権上層部にも同じように考える者がいた。彼らは事態をその方向に進めようとした。つまり我が国を攻撃させるように仕向けることを狙ったのである。>』

FDR が、如何なる外交・経済政策を推進して日本を追い詰めたかは、当メモランダム 123 話に記述 (<http://yamateru.stars.ne.jp/memol23.pdf>) している。

交戦国でもない米国が、大西洋憲章を公表したが、宣戦布告と断じられても当然だとも批判できる。

3 グルー駐日大使等の進言：日米首脳会談拒否

1941 年 8 月頃からの日本側の日米首脳会談の申し込み、グルー大使の二度にわたる日米首脳会談実施の進言は、実現しなかった。首脳会談を勧めたのは、グルー大使だけではなかった。英国駐日大使も本国に公電を発している。明らかに、会談による解決を望まず、武力衝突を望んだ勢力が FDR 政権内にあった。グルーや英国駐日大使の意見は、議会にも米国民にも知らされることはなかった。

4 最後通牒としてのハル・ノートの発出

5 真珠湾攻撃調査委員会関連 42 章に FDR 批判

『疑わしき者に有利に解釈したとしても、ワシントンの（疑われている）高官はまだ多くの疑問に答えてはいない。彼らは戦争になる可能性をよくわかっていた。それにもかかわらず、その情報を（ハワイの司令官に）伝えようとしなかった。その情報を明確に、遅滞なく、（日本の）一撃が加えられる可能性のある現場に伝えようとしなかった。』

目に見える最初の日本との戦いであるが、対日秘密戦争の最後の戦いとの評もある。

6 連合国首脳会談等：カイロ会談への蒋介石の招待、ヤルタ会談での秘密協定、ポツダムにおける無条件降伏最後通牒、原爆投下の愚かさ、戦後蒋介石支援の打切り etc

(了)